法律相談 R4 23

伊勢神宮の参道を歩いて

高橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。「高橋・日浦法律事務所」代表。

伊勢神宮では式年遷宮のクライマックスとも言い得る「遷御の儀」が取り行われた。昨年同様、数週間前に伊勢神宮を参拝してきた。私の事務所にて弁護修習をした司法修習生に渡すお守りを入手するためと、これまでの自分の1年という時間の流れに思いを馳せるためである。

伊勢神宮の参道口には木造の宇治橋と呼称されている橋が架けられている。この橋は俗界と聖界の境にある橋とされている。明治以後、式年遷宮にあわせて宇治橋も架け替えられていたと聞くが、太平洋戦争が終わった後の昭和24年に予定されていた式年遷宮が昭和天皇のご指示で延期された。その際、宇治橋だけは何とか新しいものにしたいという人々の声があり、昭和24年に宇治橋だけが架け替えられ、式年遷宮の方は4年遅れの昭和28年に行われたそうである。この4年のズレは今も続いており、今般の式年遷宮の4年前に新しい宇治橋が架け替えられている。

この宇治橋を歩いていると神聖な気持ちになる。また、宇治橋の下を流れる五十鈴川も清らかな川で、宇治橋を渡った後、御手洗場で手洗いをしながら五十鈴川の清流を見つめていると、とても心が静かになっていく。この五十鈴川は、「いすゞ自動車」の社名の由来ともなっていると聞く。

御手洗場から再び砂利石が敷き詰められている参道を一歩一歩気持ちを込めて歩き、砂利石を踏みしめる時に発せられる音を聞いていると、1年間のいろいろな思いが小さな砂利一つひとつに溶けていく感じがする。

平成になる頃、私は高田馬場駅の近くの自習室で勉強をしていた。月に1度は、その自習室から早稲田大学の近くにある水稲荷神社に参拝に行っていた。砂利石が敷き詰められている参道を歩くと、その前の月に参拝をした時からの自分の思いや行いなどが振り返られた。誰と会話することもなく、参道をひたすら歩いているときに感じる思いは、何と表現したらいいのか。ゆで卵の殻を取った後の「つるつる感」に似ていて、自分のすべてが受け入れられているような気がした。

毎日日記を書いて自分を振り返る方法もあるが、砂利道を踏みしめる際の音や風、季節の香りなどを感じながら、1ヶ月前の自分の姿を思い浮かべながら振り返ることも大切なような気がする。

毎月、参道を歩いたあのころの私は「藁にも縋る思い」が相当強かったと思う。毎月毎月同じ場所に通い続けることで感じ取れたことも大きかった。この時に感じた思いは、その後、司法試験に合格をして、アルバイト先などでいただいたお守りのすべての神社に「お礼参り」と称して参拝した際にも感じることができた。初めて参拝する神社が多かったが、かつて私にお守りを手渡してくれた方々が参拝している姿に思いを馳せると涙が流れた。

今更ながら感謝の気持ちが大切だとつくづく思う。それを一つひとつ表現することは時として難しいこともあるが、まずは感謝の気持ちを持ち続けて毎日を過ごしたい。何かに畏敬の念を持つこと、何かと日々繋がっていること、その繋がっているものに生かされていること、人は縁と縁とで結ばれていること、そこから感謝の気持ちが芽生えることなど、一人ひとりの人間が、それぞれが思うような姿や形でもっともっと感じて貰いたい。人の立場に立って物事を考え、行動をすることができない人間が、大人や子どもの中にもたくさんいる。そこには年齢の差など、もはやない。

太平洋戦争後の戦後教育の中では、道徳的な要素の少なくない部分が取り払われてしまってきた。「子どもたちを再び戦地に送るな」というかけ声が大きくて、道徳的な色彩がどんどんと取り払われてきた。日本人の気質として、何かについて悪いイメージを持つと、その周辺までをも含めた色彩を否定し無色透明にしてしまう怖さがある。そのような単純な、危険な、排他的な価値観ではなく、抽象的であっても感謝の気持ちをどこかに置いて、人の立場に立って考えられる、行動できるような「徳育」を推し進めることが大切であると思う。